

賈仁勇
證譯
笑
物
音

特別
^ 13
3633
46



門 へ 13
3633
卷 46

甲

題辭

此書や鶴賀新内小唱
仇比意此浮橋とく雑曲と旨
正本一冊怪談見立即題

傾城買談

客物語 云爾

群督圖書

巳未孟陬

啜囉哩樓主人



昭和三十三年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

敘

宋儒先生曰。聖人無夢。嬉妓无誠。亦
江湖上謠曰。誰道嬉妓無誠。殘于驪山。
此翼塚是古學。見解也。然則為有可
也。為無又可也。爰肆中文雅才子
式亭主人嘗穿花街。情作一小說。

蓋原監戒為在。為當世拔萃風流
後生暗誦此書。則免了二三瓦兩舍
陷人坑矣。破落戶子第。做得生鉄漢
真帳中之秘也。雖余應需序之。從
畫蛇添足。雷木生耳而已。

樹下主人石上敘



至花街觀物客語圖



根岸山人圖
三馬寫

自序 齋堂

怪と見え怪とせられ、支門の待伏
を、奇の容もなをも、客の物も
雪の夕、横のぬり、微降雨は朝寂莫
くも、是續日和、いざや、彩面橋の
客物、活なる人と、廊の、波の、光は

取て、長蛇の、其、百筋も、義理と情
の、二す、一筋、い、く、可、事、と、を、受、て。
唯一筋、小消、跡、系、雪、婦、の、八、朔、は、是
幽、虚、れ、出、端、な、る、あ、の、た、い、は、ど、升、い
ち、よ、格、子、先、密、走、る、よ、逢、同、が、時、春
を、バ、梅、春、れ、は、由、の、乞、く、り、く、る、風

醒く吹ぐまの字を我がととる龍
筋元のむやが通惚くも別み容
あまむ亦憎くも右の花嬢自多
漂容れお天狗ハ切掛らの紋日
のサも彼契鏝も心の東茶屋管吊
地氏贈根祿ふハ容れ足元ふて

来るり不米をせ折指も發請共
手切禿化さう右化と何と夫是
一筒に妖怪館愛ふむと退治
者ハ函開く東地に先主必魂
と集るまなうま親の異見も
闇重平は迷くを忽けれなる舌心

出^いし^しる^りの^の禿^く身^{しん}と^と骨^{こつ}を^を斬^きり^りし^し女^{にょ}竹^{ちく}立^た
一^い蓋^{がい}を^を以^もて^て積^つみ^み拵^{ぢう}神^{かみ}籠^{かご}敷^{しき}是^これ^れ
そ^そ初^{はつ}め^め人^{ひと}と^とや^や少^すん^ん呼^よば^はれ^れ哉^や
人^{ひと}と^と感^{かん}ず^ずて^て百^{ひゃく}々^々婆^ば志^し誕^{たん}と^と實^ま
情^{こころ}の^の正^{ただ}躰^{たい}と^と人^{ひと}と^と著^あ述^{じゆ}し^しる^る
部^いれ^れば^ばあ^あら^らま^まさ^さぬ^ぬア^アラ^ラ

あやしやなや

チヤ
チヤンと云爾

紙^{かみ}弄^{ろう}々^々未^みれ^れ書^{しよ}と^との^の文^{ぶん}の^の眞^{まこと}寸^{すん}
七^{しち}軒^{けん}乃^の構^{かま}々^々五^ご々^々々^々

式亭三馬述



傾城買談客物語總目

第一回

八樓穿古常情語

附リ 高慢天狗大關樓席話

第二回

純王大臣捕間夫語

附リ 全盛娼妓契約幽靈話

第三回

薄情娼妓嘆惑心語

傾城買談客物語

發語

式亭三馬著

傾城よ滋りてさしきさくべ目まはせしむる候と
いふ舟の長をたぐはせしむる候と
難別なべつの金さき中ちゆう確論かくろんの研けん不研ふけんを客まかよりまをに引ひきて法はふと
ま氣まきの二道にだうに度ひら上かみる八山はつさん園えんの契せき信しんあてて穴あな信しんがまゝの
お發はつのはつのりも幸しん氣き苦く男おとこの身みをかためてさすもあゝぬ中ちゆう
おあつても別べつをかたててさすもあゝぬ中ちゆうの女おんなよぬとも

つゝぬらち中々るの美法うその秘事の極うして
客人の長雄と見えど一万事付彩はせ
くを言上はらうく御金もさうらうらう
私を此教をまゝのうとまゝしめてまゝをまゝ
うとする似せざる通として中衛をさう
阿のゆゑにゆるりの客宿流る娼妓靡蔓る
彩達のうとも外へ又まはくあつて花房後決
乃多まゝらうまゝまゝの神をらう

らん人のみんらうとんと一松一松の社云は舞
私席の金聖中痛は流るは十寸見が妙音も
ゆゑに流る入相よ花を愛する廓の風系仙境
まゝの楽園をいん釈かすれりま今の世に
あゝうの合はるうらうらうとあうらうと
賢をも換んとし流球人とつる人ご母も
志道金と一紙のなまもつらう物の何と
世のうらうとあうらうとあうらうとあうらうと

煙くたのぼし御密の實情とこのむじがわ
ろはなごころと羽の紙膚をうひとありり
のあなま一夜に金ぎやう愛ふとまはな世
一層とくくく内境のかきと先れとまら
つて身とらひやうとくまらたぐりあふ
とぬりてまのくくをとりて

若菜屋が一構

第一回

○夜さうの念をさうりてたれ時をまよめあの人ありとくへ行村の
せうりてとぬのうふふとまらてこれとあの子けれ天の桶

かう先あるつるひのくをうひくえがわのとととあり
とよ都とつまごのぬん有らうく初乃中のみまやまら
あれぬまうくまらぬありまのぬんくそのつまら中
今中の町よりくくくくくくくくくくくくくくくくく
ううううううううううううううううううううう
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
ややややのぬんくくくくくくくくくくくくくくく
ひてひてひてひてひてひてひてひてひてひてひて
ちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち
て細合のくくくくくくくくくくくくくくくくくく
らりまらすくくくくくくくくくくくくくくくくく
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
よまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
らまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
うううううううううううううううううううう
公のあつたのぬんくくくくくくくくくくくくくく

しんじゆ中一ゆつけ **真** フムとまやアとらうと侍

えん けいさう 物点の侍 いん 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

二 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

ま ト 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍 ま 侍

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

いづくかち入喰うかこもんとてコウゴ一ちうごう
おんらうあてとんえん^{又一切}のこもん
で入ぬが全ちうごうのせいせらうめん^市の七明け
その中へ出なるとらかきこもんのこもひて考らう^{せんがごと}
いれあよつれこよりこもやよお相よまほ
とらよ清物一こらよまうひとやひけと物
ホ一^{ホ一}やたうらこおめおあうてよあ
こら^らす^すか^かん^んた^たし^しひ^ひお^おあ^ああ^あわ^わ

らあ^らり^りめ^めんでお^おと^とん^んよ^よあ^あね^ねく^く
す^す風^風ア^アゆ^ゆお^おか^から^らほ^ほう^う様^様こ^こら^らが^がこ^こら^ら
屋^屋の^のわ^われ^れが^があ^あま^ま一^一こ^こら^ら一^一の^の中^中の^のん^ん
あ^あん^んご^ごお^お一^一風^風一^一う^うら^らい^いお^おあ^あま^ま一^一世^世
の^のか^かい^いら^らあ^あら^らげ^げる^るお^おあ^あま^ま一^一あ^あん^んま^ま一^一い^いよ^よ
あ^あん^ん^ま一^一い^いか^か一^一ア^アア^ア人^人の^のま^まま^まの^のま^まて^てよ^よん^んで^であ^あら^ら
なん^んご^ごあ^あま^ま一^一の^のく^くら^らあ^あま^ま一^一ら^らい^いで^で一^一様^様に^につ^つて^てお^おあ^あ
あ^あま^ま一^一イ^イエ^エ私^私の^のあ^あま^ま一^一ら^らい^いま^ま一^一と^とく^く通^通が^がま^ます^すて

ござ

須更休題

奥室おくむろ

骨ほね

骨ほね

このあつちの物もせぬねむらひといふとむかひと人あまきりせ
しる風あつちの西にんる道つぎ行てもさぬといふを能
みとけいさあせむかひらねむらひのうらめよこもよめやま
とどろくかちまんにいそかちまんにいそまると通とんぬや
ていこのうらめやうれぬ人物を後におのませぬふふふ
とめとくしひもむらうの床花の五にまきいぬと入と
いせけやとんのうふ大わらうとや骨の骨ういらはそ
骨を縫くことあふといふや骨とて行らむとらあ
そはふれぬいぬのあまのぬらあぬていつひぬくたて
あるじろの方あひあうことハちされさ名代ありおきん
ぬかちといひまひ **骨** コウ **骨** ひら川や行もこん
あつちの骨といひまひ **骨** ひら川や行もこん
とんぬらむいすいすいぬむらひむらひむらひむらひ

とんぬらむいすいすいぬむらひむらひむらひむらひ
字の骨ほねいすいすいぬむらひむらひむらひむらひ
ら骨はむこれ初やうらめむらひむらひむらひむらひ **若**
とんぬらむいすいすいぬむらひむらひむらひむらひ **骨**
いすいすいすいすいすいすいすいすいすいすいすい
あつちの骨いすいすいすいすいすいすいすいすいすい
あつちの骨いすいすいすいすいすいすいすいすいすい
あつちの骨いすいすいすいすいすいすいすいすいすい
あつちの骨いすいすいすいすいすいすいすいすいすい

井ノ中なるこいひにけしむしづの世骨なること
ちちび大町に居りてかすよおよぶんは
肉けりかかきかきしんしんしんわん揚あけ
庭町の湯にそめ湯しん角より雪踏せん
なをしがきまらつて帰る時おとより何と
乃船あさのこゝの田町のおろりたるのり
何ら葉屋乃こころのゆんごんごむる
酒乃湯ぞりぬと喰ひ中の町よとる

なまのくさひのこはとむらさき色
白川おあひご居あちのぬいありも志り
おとちりめく朝日おあも照候せう何れと
いつらちアおらなせりぬとたれとお
あんまりさうしがおとしろく後入
あつちのめらひひそぢくさしひとこせにきき
とくさくさくさくせんせんせん
とくさくさくさくせんせん
とくさくさくさくせんせん
とくさくさくさくせんせん
前料
とくさくさくさくせんせん
とくさくさくさくせんせん
とくさくさくさくせんせん
とくさくさくさくせんせん

おのゝかみからおめりのおろくんとおろく

嵐

ナニナ

おめりトけ嵐仲がよばいハ毎夜あまあんハ

おろくのあまあんハ

嵐

イニナ

先刻ハくハらハちハぞ

おろくろくハ来ハくハ何ハらハらハくハぞハいハくハ

おろくハらハそれハおハらハらハもハ何ハらハおハを

おろくハいハちハらハおハ事ハらハくハおハらハん

おろくハらハおハらハくハ何ハらハん

おろくハよハおハらハくハ今夜ハのハ事ハハハ何ハらハん

一夕ハのハ輪ハらハらハくハ何ハらハんハらハらハよハ

おろくハちハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

おろくハらハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

おろくハらハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

おろくハらハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

おろくハらハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

おろくハらハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

おろくハらハおハらハくハおハらハくハおハらハくハ

嵐

ハテサ

えび乃くつぬちなれけつらんとせうりゆのよといふらんしきく
田中乃くつら声すこゝしねん様かあぶしなついで
まづいさくらしらぬぬのあきづくよゆんやうもして
おとていさくらしらぬぬのあきづくよゆんやうもして
麻乃たつらぬぬのあきづくよゆんやうもして
土のあつらぬぬのあきづくよゆんやうもして
俗よらぬぬのあきづくよゆんやうもして

おつらぬぬのあき

第二回

北方に佳人あり一度嘆かむ城とかくもた二
度よろくくいと園とかくくといふ義母とやめ

くつ詩と今の遊里のあよよがもし年といつれぬらう
すごいあよよや新あ何ともむ癖といふあのみつれよく
諸ろあつらぬぬのあきづくよゆんやうもして
三月のくあよよあつらぬぬのあきづくよゆんやうもして
本幹いあつらぬぬのあきづくよゆんやうもして
とつらぬぬのあきづくよゆんやうもして
つらぬぬのあきづくよゆんやうもして
つらぬぬのあきづくよゆんやうもして

かなく純じゆんよと人ひとをりよみ州しゆをりて瓶びんとて
 瓶びんとてあめの人ひと乗のりとん何なにぐらふはまにんそり
 ぐの申まを間の店たなよ居ゐよとれバばよよ
いふ海うみのふくしてらふくしよもて又またいふよ
いふ上うへのふくしてらふくしよもて又またいふよ
 及およびよ身みよふよの徳とくを昔むかしのよを
 くらたこと今の世よに浮う世よとよる人
 みずかきよ家いへまよとよそれよつびて紙かみよ
 の程ほど八はち幡はたの香かほ入いれ札せつ十じゆ札せつ次つぎ洞どうの傳つたせよとよ文ぶん

名なよれたたまひいよらむげいちやと徳とくよもに
 せよとよ何なにの志しをまよ何なにのまよく屏びん風の
 かこよまよことせほよ希まれあらんごり
 何なにのよみ州しゆくつふ大おほげいいややあらんごり入いれ
 つまわいよいかこよとひ徳とくややたんらんあらんごり
 つかのまよいトト孫まごまきまきああ孫まごまたまきまよごらんむらうのんごり
いあんのまよのよぬひごまよにてそほのあ葉はやあやう
いあこつひであらんごり出いよいあらんごりいあらんごり
いあらんごりいあらんごりいあらんごりいあらんごり

伊きなんよイキニキ**為**ぞミダシク**又**かんミチ**カ**りヨリ

おのんぞんおれをておのんミチ又かんミチ事とらん

おのんミチ何とおれをておのんミチトニミヤクニシノリナニノ
ミチ

おのんミチおのんのおれおのんねミチおの

おのんミチおのんおのれおのんミチおのんミチおの

おのミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチ

おのミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチ

おのミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチ

イエイ**カ**サカ**シ**トシ**ハ**シハ**シ**トシ**ハ**シハ

カシカトシ**ハ**シハ**シ**トシ**ハ**シハ**シ**トシ

シトシトシトシトシトシトシトシトシ

トシシトシトシトシトシトシトシトシ

シトシトシトシトシトシトシトシトシ

トシシトシトシトシトシトシトシトシ

シトシトシトシトシトシトシトシトシ

おのミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチおのんミチ

まもちまろくヨト せきかありの人ヨミ
小つて 伏積ひたすか えんくくまろくは野なん
 せいぶとす せんのか麻ハモウせまる中ハ ヨミ ア
 今世のしきモト 伏積さんハ 世まさんハ せんハ 今
 しょうせきをほくひらうせうんハ せうが
 びー昔今分今ハ 中づくさんハ せんハ 中ハ
 果の有とともせいの世とれひなんハ

あらうらうちらんがうしはひひ日
 せうトなんーて世まさんハ せんハ 中ハ
 ぶんぶんせいの世まさんハ せんハ 中ハ
 今今さんハ せんハ 中ハ 梅の世まさんハ
 こんの通わればとたよるのいんハ
 せうせうしんせいの世まさんハ せんハ 中ハ
 世まさんハ せんハ 中ハ 梅の世まさんハ
 中世まさんハ せんハ 中ハ 梅の世まさんハ
 中世まさんハ せんハ 中ハ 梅の世まさんハ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 10 lines of text, starting with a large initial character. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 10 lines of text, starting with a large initial character. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

どのものもうちよそでもしよあつたやうにゆく
 だん一人おんとこれよんそちあくには合てあか
 施アハより
 こそく行く旅も道もめづむりのいらほひよ
 のませまういよよりてううぐりてより
 アフス イヤ
 ゲイフウ
 と知と男が女のいひもさういひめか何く
 昔男のほくはまのらまらうそく我ま
 が持こぬまのらまらうそく
 こころ思つてあつたやうに
シヤ
 ヒントアケル
 マニカハセ
 タマハシヤル

どのものもうちよそでもしよあつたやうにゆく
 だん一人おんとこれよんそちあくには合てあか
 施アハより
 こそく行く旅も道もめづむりのいらほひよ
 のませまういよよりてううぐりてより
 アフス イヤ
 ゲイフウ
 と知と男が女のいひもさういひめか何く
 昔男のほくはまのらまらうそく我ま
 が持こぬまのらまらうそく
 こころ思つてあつたやうに
シヤ
 ヒントアケル
 マニカハセ
 タマハシヤル

志ぞんかゝん此 聖書 活人のまゝいひかゝるあゝわれこそ今
あのををりきこる紙へ一頁の紙はけし一はくはよき書きて
あつて法はまゝにそのあのをとて居紙へうきその上へ紙をまき
母をうちあてまじし中し一ありとての紙は又あつてはへてあつて
足いるを秘多のしをたさるあつてんよあつてまじして家にあつて
とて紙をよるくし紙をひらきよまほし紙をいんていん
に紙をよるひなんて紙をよるあつてびに紙をい
ままうて紙をよるいよと紙 紙 イヤそいし紙をよる
いんて紙をよるいんていんま今や毎日何れいんて
がしりあつて湖月と紙をよるあつての今いんて

来し紙をよる又千利があつて業乃湯よりあつて
川へ入るいんていん入る堂が書今し丹青が頭
今が書合つて足紙よしりあつていんていん
なぬまじし紙をよるいんていんま
道合へは供しりいんていんま
中し紙をよるいんていんま
く紙をよるいんていんま
怪場よ居りりいんていんま

中布でうららやほ〜く〜な〜
縁 ト志守人

とのどろたろまのトも較も里のトカもたにこそて ゆき **縁** ト志守人

身しるればとどろ〜ごうま〜やそぞのめねぬえつゆまもねらる

軒のほぬ七のほぬゆふ **浮世縁** 白志守人

丁いさのよ耐刻も〜 と〜ふそめゆ〜

ふさう〜く〜か〜あ〜う〜の せん **浮世縁** せん

戸ア〜う〜二階〜あ〜の〜の こけ **浮世縁** せん

この雪より **浮世縁** せん **浮世縁** せん

明なる 新う〜と〜りのめ〜をい較と〜らあ〜とあ〜の

老のせ あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

縁またのま〜い〜ら〜あ〜床とぬ〜 **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

あつた **縁** あ〜り〜は〜あ〜が〜し〜あ〜り〜あ〜ん内ぶ〜

男がまじり申へんはよあ人 **徳** 三 ても今もいふまじり
よののいふまじりあはるるを病のなるじか
ごのまじりいふまじりいふまじり申のいふまじり
かろくまじりいふまじりいふまじり申のいふまじり
後しりいふまじりいふまじり申のいふまじり
世話たてのまじりいふまじり申のいふまじり
おぐんかろくまじりいふまじり申のいふまじり
アトゴのまじりいふまじり申のいふまじり

て今もいふまじりいふまじり申のいふまじり
よののいふまじりいふまじり申のいふまじり
ごのまじりいふまじりいふまじり申のいふまじり
かろくまじりいふまじりいふまじり申のいふまじり
後しりいふまじりいふまじり申のいふまじり
世話たてのまじりいふまじり申のいふまじり
おぐんかろくまじりいふまじり申のいふまじり
アトゴのまじりいふまじり申のいふまじり


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



とてはかたむかひのうらみはなほあつたてのちのちのち  
乃くはのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
とてはかたむかひのうらみはなほあつたてのちのちのち  
猶も衆の御ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
うらむえ 伏猪 甚痛の甚痛の甚痛の甚痛の甚痛の  
がちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
かうらむかひのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

腹がむかつたてのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あ あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ころか あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
むら あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
吾 あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
と あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ら あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
た あ のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち





















傾城をとりし  
客のちう 五つを  
侍 今まじふらふらふにれりし  
とらるるへ 五にれよ及ぬ落付く先ハ  
ぬらまきよりづく 櫻 作あしや中しよ  
まらそれまじくハ 櫻 春の後扁 ちやまきの  
チヨウ くらり

傾城買談客物語 尾

後叙

娼門と劇場ふ比 見え彼に大さくけり  
是よ故日ろ大仕掛ありけりまば娼婆が眼玉の黒  
幕ハ父堂の二階とある留子室をくらに賣切の  
れりるれと大いとお大空り 將鋪初のちちま  
あまひ 節 仇 優の程向よ等しハ初の金廿作も  
女郎の胸乃中より惚れさせ切この早寝軟塵  
あしとる 終のまへ ぼよよあめ清攪し又

弓廊を引返しの幕明富本すす見の  
 一曲名見崎が高調子いさゝも此廊は  
 止ふ予が扱あらん式亭主及例の居續の  
 帰るま来に青樓の楽屋を探すねら  
 いありまらるる予は跋せよと云予おえ生い志周  
 裁合れまがれれば唯見負連の口立に板本の犬入  
 りる事神をも扱あらんやんまよと云甫

式亭門葉 楽亭馬笑跋

跋

夕の床り行ふと断る朝の風を室平をやら  
 させ浴衣染乃意氣路あとも振新祿あらん  
 小紋は着むと未元が髻は社ももいんく瘡の  
 管と見ぬ心い三浦團小身と扱さ坊揃はくし  
 首とく和らきナラし文句ハ大平を吐く酒客も  
 一文銭れ各坊も切ら出ると生肌みはいらそら伎具  
 とせまらんや其まぬ福み式亭主人言葉の

後や翁をけむるに立上るる折と一れは  
 半襟の顔目も志ぬ野暮なる平け書と  
 ぐらゝ見え見えと忽ち見立は悟道と教  
 暗闇の趾と秋葉燈の  
 明輝を何の酔道とて顔平

鈍亭祭和樽識の

後叙

聞説まゝとてあやむる鶴橋は俚言  
 の事相應さんとと玉樓の確言と志のハ  
 何れどみ道尻は光る電小いといぬ思ひの獨  
 ち中田甫の桂子針はさうと客待  
 青とかがらある見返る柳子三曲の及は  
 ばかきも思ひ日本堤乃雪黒色し

予の海の内より人々を招きとるなり方會の言  
はれしをわがづから花實の余情を以て  
すゝめ其あらまゝと式真き人かれ上ぬ  
筆と走り書すはるるをわがたすくみは  
天憲とかくらくを辨はらるる

群督圖書

戯友

十返舎一九

20  
44  
川

5421

7

